

「日々の理科」(第1624号) 2018 (H30), 12, 19

「2018年のふたご座流星群観測(3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

※写真はすべてスウェーデン・ヨックモック郡・ポルユス村撮影(東京からの遠隔観測/2018, 12, 13~15)

数年に一度、11月中大出現を見せる「しし座流星群」は、爆発を伴う-4等~-5等の「火球」を伴うことが多い。火球が飛んだあとには、「流星痕」と呼ばれる、淡い雲のようなものを残すこともある。



これが、しし座流星群の流星痕だ。自ら発光し、オーロラと同じように磁力線に沿って、筋状の構造(レイ)を伴う。これは私の自説だが、流星痕は「火球が飛んだあとだけ一時的に出現するオーロラ」と言える。



しし群の派手さに比べると、ふたご群は「地味な流星群」の一つだろう。1時間あたりの数こそ多いが、爆発を伴うものは少なく、火球も流星痕も稀である。写真に写る流星も「針」のような単調なものが多い。



しかし、デジタル一眼レフを使った、遠隔定点観測では、時にすばらしい流星を捕えることがある。たとえば上の写真は、うしかい座の近くに飛んだ流星で、最初は暗かったものが、突如増光してあっという間に燃え尽きている。大気圏の濃い層に入った時に、流星の元となる隕石が一気に蒸発して、光のエネルギーに変換されたのだろう。



今回のふたご群の流星で、一番印象に残ったものが、この写真である。地平線とほぼ水平に飛んでいる。ふたご座は画面左に遠い。この流星も決して明るくないが、飛んでいる途中で、キラリと増光している。穴のあいた一粒の真珠を、流星が貫いたようだ。凍てついた針葉樹林も相まって、実に美しい。